

ワールドウィッチーズ異聞
くノ一の魔女二



三之卷

パ・ド・カレーは行政区分としてはノール・パ・ド・カレーに属し、ガリアの最北部にある地域である。

ノール・パ・ド・カレーは、本来工業によつて立つ地域だが、パ・ド・カレー自体は、例外的に農業、とくにワインの産地として著名であり、同時にカレー港は重要な旅客港であつた。

その現領主であるピエレッテ・アンリエット・クロステルマン——ペリーヌ・クロステルマン中尉の爵位は侯爵。

領地さえネウロイに奪われなければ、この肥沃な土地がもたらす富と港湾施設の収益は莫大であり、ウィッチとしての彼女のありようも今とは大きく異なつていたのではないだろうか。

今は復興のために身を粉にして働いているらしいが、とにかく被害が甚大で、人手はいくらあつても足りないことは、何人ものウィッチが義勇兵としてかの地へと訪れたニュースを見ずともわかる。

そんな事情からとにもかくにも人手、特にウィッチの力は必要で、自分はそのへ義勇兵として向かう手はずになつてゐる。軍籍などの問題は上の方で解決してきてくれており、自分は一時的に扶桑陸軍を離れて現地へ赴く手筈が整つていた。

個人的な理由での義勇兵参加ならばストライカーユニットの貸与はありえないのだが、今回

は連合軍からの依頼なのに加えて、自分のユニットが木製疾風という誰も使いたがらないものであるのと、扶桑にいる友人直々の口添えのおかげもあり、そのまま利用を許可された。

義勇兵に來ました、ユニット持ってきてませんでは格好がつかないしな。このあたりは扶桑陸軍の面子もふくめてだろうと考えられる。

《ぎっくり腰》作戦の報告書をしたためたあと、ウィーゼ少佐から飛行ユニットの操縦訓練をたたき込まれ、パ・ド・カレーに向かっていた。本来なら、作戦終了後に多少の休暇をもらえらるはずだったのだが、作戦行動中の自分の行動に腹を立てたウィーゼ少佐がそれを握りつぶし、訓練という名の地獄の特訓を強いてきたのだ。

とはいえ、《ぎっくり腰》作戦での自分の行動は確かに少佐の勘気をこうむるほどだったのは否定できない事実で、自分はそれに唯々諾々と従うほかはなかった。

その訓練たるや、今思い出してもうんざりする代物で、少佐自らの指導で空戦理論についての座学から始まり、基本マニューバやロットテ戦術の一から十まで仕込まれてしまった。

模擬戦の際には、休暇中だった大川少尉も少佐と一緒に自分を追いついてきたあたり、日頃から自分に言いたいことがあったのだろう。

こちらとしてはたまったものではない。

「まったく。あのクソツタレども、覚えているよ」

つまり、クロステルマン侯の居城間近、眼下に広がるワイン用の葡萄畑が見え始めた場所ま

できても、そんな悪態をついてしまうのは仕方ないと思うのだ。

『なにがクソツタレなんですの、デイル初美』

一瞬のノイズの後に、しっとりと柔らかみのある声がイヤホンから流れてきた。

しまった。通信チャンネルを開いていたか。

ちなみに、デイルとは女性の騎士に対しての敬称である。

「なんでもありません、お久しぶりです。クロステルマン侯。初美あきら、騎士の勤めとして侯のもとに馳せ参じました」

『どうだか。まあいいでしょう。堅苦しい挨拶はぬきにして、今はネウロイの撃破です。ついて早々申し訳ないですけど、そこから北上して下さい。高度四千で偵察型ネウロイが二体やってきています』

「了解。これより《迷彩》を使用します」

固有魔法により無線が使えなくなり、ホワイトノイズが走る。

「ついて早々これとは、なかなか大変な状況じゃないのか？」

太陽を背に高度を上げつつ、上昇を開始した。

指示通り高度四千まであげてしばらくすると、高速で飛来する二機の小型ネウロイが確認できた。

同高度に調節して真正面に位置どり、狙いを定める。

普通ならできないことだか、《迷彩》のお陰でこんな芸当も可能だ。

ホ一〇三の照準一杯に左側のネウロイが迫る瞬間、引き金を引いた。

十二・七耗弾が奴らにふりそそぎ、一機を撃破、そのまま右のネウロイに狙いを移し、こちらも破壊する。

コアのない小型ネウロイならば手玉にとるがごとし、だ。

「クロステルマン侯、偵察型ネウロイの撃破に成功した」

《迷彩》の使用をやめてインカムで侯爵に連絡する。

『了解しましたわ、デーム初美。ご苦勞様です。それでは、こちらにいらして下さいな』